



経 歴	
平成元年 4月	自治省採用 自治省財政局交付税課
平成元年 7月	北海道市町村課
平成2年 5月	同 財政課
平成3年 4月	自治省大臣官房総務課
平成4年 9月	同 財政局公営企業第一課
平成5年 7月	同 財政局公営企業第一課 企画係長
平成6年 4月	倉敷市企画部長
平成8年 4月	鹿児島県商工政策課長
平成9年 4月	同 企画調整課長
平成10年 4月	同 財政課長
平成12年 4月	自治省財政局指導課課長補佐
平成13年 1月	内閣官房行政改革推進事務局 公務員制度等改革推進室 参事官補佐
平成15年 9月	総務省自治税務局 固定資産税課課長補佐
平成16年 4月	同 自治財政局調整課理事官
平成17年 4月	広島県総務企画部財務総室長
平成18年 4月	同 総務部財務局長
平成19年 4月	同 総務部長
平成20年 4月	同 総務局長
平成21年 4月	現職

今こそ“霞ヶ関”へ！

総務省大臣官房政策評価広報課広報室長 松田 浩樹

「広く世の中のためになる仕事がしたい！」— そう思って、役所の門を叩いてから、早いもので20年以上が経過した。皆さんも、今、同じ様な思いで、“霞ヶ関”を志そうとされているのではないだろうか？

■縦割り意識を捨て、国の政策を下支えする“霞ヶ関”の一員に

我が国は、今、大きな岐路に立たされている。将来にわたって発展を享受できるか否か。幸せな国であり続けられるかどうか。そんな重要な時だからこそ、この国を何とかしたいという熱い思いを持った有為な人材に、一人でも多く“霞ヶ関”の一員になって、共に戦ってほしいと心から思う。

「政治主導」が単に役人を政策決定の場から遠ざけることと履き違えた議論が一部にあるが、新政権が目指しているのは、健全な「政」と「官」の関係 — 国民の信託を受けた「政」が責任を持った判断を行い、この国をリードする、そして、その判断が的確になされ、国を誤ることがないよう、「官」が全身全霊を傾けて政策を下支えする、まさに「政」と「官」が互いに響き合う関係。このコラボレーションなくして、この国が今後活路を見出すことなどできはしない。新たな価値観で時代を切り開いていくことが求められている今だからこそ、これまで以上に、「官」の側にも、政策を下支えする役割、真の専門性、優秀さが期待されているのである。

そして、この国を良くしていくために、いずれの役所も重要なミッションを担っているということを是非忘れてほしい。つまり、既存の序列で物事を考え、〇〇省だ、〇〇省だと、入る前から、縦割り意識丸出しの発想に陥るのではなく、まず、この国のため、日本国政府の一員になるのだという強い思いをしっかりと腹に据えて、役人を志してほしいと思う。

■幅広いフィールドそして“手触り感”

その上で、では、どのセクション(役所)を選ぶべきか？

何か特定の分野の仕事がしたいという明確な思いがあるのであれば、迷わず、その分野を所掌している役所を目指されたら良いのではないかと思う。私は、恥ずかしながら、この分野という形での絞込みができなかった、と言うより、あれもやりたい、これもやりたいという思いが断ち切れないまま、社会に出るタイミングを迎えた。

ご案内のとおり、外交、防衛など一部の分野を除き、国民の皆さんに届けられる行政サービスの大半は地方自治体が担っている。その地方行政を所掌する総務省は、したがって、ほぼ全ての分野の行政をカバーして仕事をこなしていくことになる。加えて、総務省は国の行政を横断でチェックし、国・地方を通じた行政体制をどう組み上げていくか、この国のかたちをどうするかといった問題に果敢に取り組むことがミッションとして課されている。さらには、我が国の将来の発展を牽引するICT分野の業務などの推進も総務省の重要な任務の一つである。このように、他府省とは比べものにならない幅広いフィールドで己の力を存分に振ることができるのが総務省の魅力であり、未だ消えない、私の“あれもこれもやりた

い欲”は完全に満たされ続けている。(私が、縦割り意識から自由でいられるのも、こうしたことが大いに関係しているのだろう。)

そして、もう一つ、“手触り感”のある仕事ができるというのが総務省の大きな魅力として挙げられる。“霞ヶ関”はどの役所も業務の主体はプランニング。日本全体、世界を見渡したスケールの大きい仕事ができる反面、手触り感がややもすると乏しくなるきらいがある。その点、総務省では、地方の現場に飛び出して、そこの人間になって仕事をしていくというサイクルが用意されている。「現場で物事は起こっている。」それを肌で感じ、直接人々の思いに触れ、共に笑い、共に泣き、そうした中で、仕事を成し遂げることができた時の充実感は格別である。

幅広いミッションの下、“霞ヶ関”と“現場”の双方でしっかりと成果を上げていくのは正直言って本当にしんどいが、だからこそ、他では味わうことのできない、「広く世の中のために自分は貢献できている」という充実感が間違いなく待っている。

一度限りの人生、熱い気持ちを持って世の中のために戦ってくれる諸君を心からお待ちしたい。



最愛の家族とともに



至福の時♪

経 歴

平成15年 4月	総務省採用 総務省行政評価局政策評価官室
平成15年 8月	鳥取県総務部市町村振興課
平成17年 4月	総務省行政管理局主査
平成19年 4月	同 行政システム企画課 個人情報保護室個人情報保護第三係長
平成21年 4月	現職

あれも、これも。

総務省大臣官房政策評価広報課課長補佐 本間 ちい子

■ある日の風景

16時過ぎ。課内では打ち合わせが続いている。電話も断続的に鳴っている。そんな勤務時間たった中、一人机を片付けて帰宅の途に就く私。途中になっている仕事については、ひとまず電車の中で考えよう。何となく、「お先に失礼します」の声も小さくなってしまふ。

「ただいま。」保育園に到着し、駆け寄ってくる1歳の子供を抱き上げると、仕事モードから、自然とスイッチが切り替わる。先生に簡単にあいさつをし、子供を抱きかかえて帰宅。重たいのだが、なんだかんだ言って歩いてくれない。ま、いいか。最近、日中のできごとなども話してくれるようになってきた。帰宅後は、朝のうちに下準備をしておいた食事を食べさせ、入浴して少し遊び、寝かしつけ。子供の寝顔を見ているのが、一日のうちでいちばんほっとする瞬間。

■現在の勤務体系について

ワーク・ライフ・バランス。仕事と家庭との両立。言い方はいろいろあるが、総務省に入ってからこれまで付き合いのなかった背景を持つ人が多い人が多く、子供がいなければ接することのないような社会との関係も多く生じている。また、気まぐれな子供の相手をしてい

国の行政の仕組みと地方の実態の両方をみて、全体としての基盤づくりに携わりたいと考えた私は、総務省の門をたたいた。

これまでに経験してきた、国の行政評価制度や組織管理、情報公開制度等に関する業務は、直接的に国民生活に影響を及ぼすものではないかもしれないが、いずれも国の行政制度の根幹に関わるものであり、霞が関の仕事の基礎となる部分である。その重要性をかみしめ、やりがいを感じながら取り組むことができた。また、希望がかなって地方自治体に向向した際には、日々住民と接する市町村役場の方たちと一緒に財政の仕事に携わり、夜になると仲間と飲み明かしたりもした。

業務は面白く、充実した楽しい毎日ではあったが、いずれ、仕事と家庭のどちらを取るか？という選択が迫られる日が来るのだろうという漠然としたイメージは持っていた。育児休業の取得や勤務時間の短縮など、子育てのための制度は整っているけれど、それを実際に使うことは難しいのではないかと正直言って、産休に入るときも、その後職場に戻ってくることはできるのだろうか、という不安は、ぬぐい切れないでいた。

現在は育児時間を毎日夕方の2時間取得しているため、私の退庁時間は16時となっている。それによって、一緒に仕事をしている課内のメンバーにも、他のさまざまな人々にも、迷惑をかけていることは事実だと思うし、それについて申し訳ないという気持ちもある。

だが、時間が限られている分、以前より効率を意識して仕事をするようになった。それに、育児休業中や子どもが通っている保育園で知り合いになった人たちは、社会人になってからこれまで付き合いのなかった背景を持つ人が多い人が多く、子供がいなければ接することのないような社会との関係も多く生じている。また、気まぐれな子供の相手をしてい

ば、(多少は)我慢強くもなるし、この子育ての経験は、仕事にも活かしていけるはず。今周囲からいただいている配慮には、いずれまた全力で働けるようになったときにお返しすることで許してもらいたいと考えている。

■終わりに

総務省の仕事の魅力、やりがいについては、私も大いに感じており、他の先輩方と同様、これらについてもっと語りたいこともあるのだが、今回は、ひとまずそれはおき、私のような仕事の仕方もありなのだとすることを、まずは皆さんに紹介することにした。

現在私が活用しているのは、育児時間の取得による勤務時間短縮の制度だが、その他にも、総務省では、例えば週に一定程度の勤務日を在宅勤務に振り替えるテレワーク制度を利用するなど、少なくない人たちが、それぞれの業務の状況に応じた工夫により、仕事と家庭との両立を図っている。仕事だけではなく、あれもこれも、いろいろなことに欲張りしたいというあなたにも、ぜひ、臆することなく総務省の門をたたいていただきたい。



クリスマス時期に課のメンバーと